
魔法先生ネギま！～時空を統べるもの～

ヴァルスラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜時空を統べるもの〜

【Nコード】

N2351P

【作者名】

ヴァルスラ

【あらすじ】

魔法先生ネギま！に
チートな主人公が入る
小説です。

主人公が入ることによって原作の展開が
変わるかも！

チート設定、原作ブレイクなどが嫌いな人は

「戻る」をクリックです

初投稿で言葉がおかしかったり誤字、脱字があると思いますが
見ていってください！

プロローグ（前書き）

プロローグです！

誤字、脱字があつたら
すいません

プロローグ

ある日、平和だった
はずの村に突如、悪魔が現れた。

悪魔により村は紅に人は
石に変えられた。

破壊と絶望をもたらす
悪魔に人々は恐怖と絶望
に苛まれた。

人々はただ逃げ惑うこと
しかできなかった。

なすすべなく逃げ惑う
人の中に一人の少年が
静かに立っている。

その少年は辺りの光景に
戸惑うこともなく恐怖に
怯えることもなくただ
立っていた。

少年は生気を宿さない
冷たい氷のような眼を
し、顔には表情という
ものが存在せず、感情も
なく、何もない虚無が

広がっていた。

第一話 卒業！修行場所は日本！？（前書き）

誤字、脱字があつたら

すいません m (| |) m

第一話 卒業！修行場所は日本！？

ここはウェールズの魔法学校

ここでは、魔法について
学んで『立派な魔法使い』になれるように
色々な人が努力している。

そこで俺はここを今日、
卒業するんだよね。

えっ？卒業式は何時かって？
そんなの今日にきまつて
るじゃん。

じゃあ、なんでこんな所
にいるのかって？
そんなのサボってるに
決まってるじゃん

それにサボるといったら
屋上でしょ

えっ？何？
まだ何かあんの？

俺は誰かって？

そんなのいずれわかるって

それに自己紹介とか面倒し…

……わかったよ！

紹介すればいいんだろ
すれば！

……はぁ、面倒

俺はリゼル・D・クライス

今日でここを卒業する
魔法使いさ！

年齢は数えて10歳

容姿は茶髪でゴバルトブルーが濁った感じの瞳をしている。
まあ、アメリカ人の
失敗作だな（笑）

それと俺には色々と
稀少技能とかがあるが
これを使うと色々と面倒
から隠してる。

おかげで魔法学校では
落ちこぼれた。

えっ？稀少技能を見せろ

つて？

作者がこの小説を書いてれば、そのうち出てくるだろ。

はい！ 説明終了！

俺は寝るから！

おやすみ！

…… z z z

バン！ ↑ 屋上のドアが開く音

ドス！ ↑ 寝ていた俺を蹴る音

ドカーン！ ↑ 蹴られた俺がぶっ飛んで中庭に落ちた音

「しまった！やり過ぎた！」

s i d e ？

僕はネギ・スプリングフィールド

今日でこの学校を卒業して『立派な魔法使い』になるための修行を
することになる

「ネギ、修行場所は何処になったの？」

僕の隣にいた女性が
話しかけてきた

この女性はネカネ・スプリングフィールド

腰まで延びた金髪に
整った顔立ち

性格も完璧で僕の中では
最高の女性だ

「今から見るところだよ」

そして、卒業証書に
書かれた修行場所を
見ようとした瞬間

ドカーン！！

僕らがいる中庭に何が降ってきた

「な、何！？」

お姉ちゃんもかなり動揺
してる

ここは、僕がしっかり

してお姉ちゃんを安心
させないと

「お姉ちゃん！僕の後ろに」

お姉ちゃんを僕の後ろに
下げて、何かが降ってきた方向を観る

土煙の中から人影が
出てきた

「…痛つてえ、俺じゃなきゃ死んでたぞ」

「リ、リゼル（君）！？」「」

s i d e リゼル

……危なかった

もし、俺が丈夫じゃなかったら絶対に死んでた

「リ、リゼル（君）！？」「」

ん？あそこにいるのは…

「おお！ネギにネカネさん、どしたの？そんなに驚いて」

二人が何かに驚いている
ようだったので聞いてみる

「お、驚くに決まってるじゃないか！？ いきなり降ってくるんだから！」

ああ、そーいや俺って
屋上から落ちたんだっけ？

確か誰かに蹴られたような……？

「それで大丈夫なの？」

「ん？何が？」

ネカネさんが俺に大丈夫かと聞いてきたが何が大丈夫なのかわからない

「身体だよ！音的に凄いい勢いで降ってきたみたいだけど？」

ネギが俺の疑問に答えて
くれた

「大丈夫だろ、俺って丈夫だし！ 昔、滝から落ちても大丈夫だったし」

何故かはわからんが昔から身体だけは丈夫なんだよね

「確かにそうだけど……」

ネギとネカネさんが俺を
心配そうに見ている

「大丈夫だっって言ってるのに心配性だなあ」

「いや、こういう場合これが普通だと思うんだけど…」

ドダドダドダ

ん？何の音だ？

ドダドダドダ

足音？

「リゼル！！」

声のした方を振り返る

そこには赤髪の女の子が
立っている

「おっ、アーニャじゃん。どしたの？そんなに慌てて？」

この子はアンナ・ココロウア

皆からはアーニヤと呼ばれている

ちなみに俺とネギの幼なじみだ

性格はツンデレだな！

ツンデレがわからない奴はググレ！

「な、何で屋上から落ちたのに平気なのよ！」

「えっ？何でって俺、身体だけは丈夫だし」

ん？待てよ…

何でアーニヤは俺が屋上

から落ちたって知ってるんだ？

「なあアーニヤ。何で俺がおk」「そ、そう言えばアンタ卒業証書もらってなかったわね？」……」

話し変えやがった

まあいつか怪我もないし

「はい！これアンタの卒業証書！」

「おっ、ありがと！そっぴや何でアーニヤが俺の卒業証書もてんの？」

「校長先生に頼まれたのよ！　べ、別にアンタのためじゃないんだからね！／＼／」

な、何だ……

この絵に描いたようなツンデレは…

「は、早く受け取りなさいよ…／＼／」

恥じらいと上目遣いは一緒にやってはいけません！混ぜるな危険な
みにヤバイ！

と、とにかく受け取るか

「あ、ありがとう」

「そういえばアーニヤとネギは修行場所は何処になつたんだ？」

「私はロンドンで占い師だつて」

へえ…アーニヤは占い師か

「ネギは？」

「今から見るとこ」

ネギが修行場所が書かれた卒業証書を開ける

「え〜と…日本で学校の先生をやること」

ネギは学校の先生か

まあ頭いいし大丈夫か

あれ？ネカネさんが何か動揺してる

「ね、ネギが学校の先生なんて！？　まだ子供なのよ！校長先生に抗議してくるわ！」

「あ！私も行く！」

「ち、ちよつと待ってよー！」

ネカネさんとアーニヤが爺さん（校長）に抗議に行った

それをネギが追いかける

まっ、あれはほつといて俺の修行場所はっ

そっ言っ俺は卒業証書を開けた

えゝと、どれどれ

『日本の学校で先生をやること』

……俺も爺さんのところに行くか

第一話 卒業！修行場所は日本！？（後書き）

作者「……短い」

リゼル「それに駄文だし」

作者「まっいつか投稿しちゃったし！」

リゼル「いや、これ書いてる時点ではまだとうk」「はい！次回はどうとう麻帆良に行きます！」……」

作者「それでは次回も見てくださいね！」

第二話 新任教師は子供先生！！（前書き）

第二話 新任教師は子供先生！！

side リゼル

俺は今、満員電車の中にいる

なんで俺がこんな所にいるかと言うと話しは数ヶ月前に遡る

俺はネギと修行場所が

被ったので爺さんに抗議に行った

爺さんのところに着くと

ネカネさんとアーニヤが

爺さんに何か言っている

「何かの間違いではないのですか？ 10歳で先生など無理です！」

「そうよ！ネギったらただでさえチビでボケで……」

上からネカネさん、アーニヤの順で爺さんに抗議をしている

「しかし、卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ立派な魔法使いになるためには頑張って修行してくるしかないのう」

爺さんがネカネさんとアーニヤの言い分を上手く受け流す

さてと、そろそろ俺も加わるか！

「おい爺さん！話してるとこ悪いがこれはどういう事だ？」

そう言つて俺は爺さんに

ちかより修行場所が書かれた卒業証書を見せる

「おお、リゼルかどうした？卒業証書なぞ見せて？」

「惚けるな！ 何で俺とネギの修行場所が被つてんだよ！」

俺は惚ける爺さんに少し怒りを込めた言葉で聞く

「ほお、珍しいのお 修行場所が被るとは しかしさっきも言つたように卒業証書に書かれていたのならそこが修行場所じゃ変更はでкинよ」

「珍しいですませるなよ！ しかも俺が先生なんて無理だからな！ この学校でも落ちこぼれだったんだぜ卒業できただけでも奇跡だぞ！」

「まあ、諦めるんじゃないや修行先の学校の学園長は知り合いじゃから安心していつてくるがいい」

「いや、だから無理だつて……ん？待てよ……」

ネギつて頭よかったよな

何たって魔法学校を首席で卒業したしな

よし！一様修行には行こう。だが、面倒事は全てネギに押し付けて俺はのんびり過ごすか！

「わかった爺さん！俺、修行頑張ってくるわ！」

「……リゼル、何か変な事考えてない？」

ネギが何か言ってるがスルーだ

「それじゃあ二人とも頑張ってきてるのじゃぞ！」

「「はい！！」」

と言っわけで飛行機乗って電車乗り継いで麻帆良学園に着いたわけよ

それで今は麻帆良学園の

中の電車に乗って修行先の麻帆良学園女子中等部に向かってるわけ

しかも乗ってる電車が

満員電車でもの凄く苦しい

ネギも結構ヤバそうだ

おっ！着いたみたいだ

プシュー

電車の扉が開いた瞬間、乗っている乗客全員が降りたから俺とネギは人混みと言う名の川に流された

「今のセリフ上手くなかった？」

「リゼル、何言ってるの？」

「ネギよ、聞いてはいけないものが世の中にはあるんだ。覚えておけよ」

さてと、電車から降りて

人混みからなんとか脱出できたが道がわからん

「ネギ、道わかる？」

「うーん？ちよつとあやふやだから誰かに聞いてくるよ」

「おお、任せたぞ。わかったら戻ってこいよ」

「わかってるよ！」

さてと、待ってるついでに寝るか。
昼寝サイコー！！

z
z
z

s i d e ネギ

え〜と、誰に道を聞こうかな
あっ！あの人たちに聞こう

「すいませーん！」

s i d e ?

「ヤバイヤバイヤバイ！今日は早くでなきゃ行けなかったのにこれ
じゃあ遅刻だよ」

今日は何でも新任教師が来るらしいので出迎えなければなら
ないらしい

あつ！出迎えるのは私じゃなくて隣にいる近衛 木乃香っていう子
なんだけど学園長の孫娘だからって新任教師の出迎えなんてしなく
てもいいと思うのよね

「なんで学園長の孫娘のアンタが新任教師のお迎えまでやんなきゃ
なんないの？」

「スマン、スマン」

「まったく学園長の知り合いならそいつもジジイに決まってるじゃ
ん」

「そうけ？今日は運命の出会いありって占いに書いてあるえ」

「えっ！マジで！？」

運命の出会い！？！ということはどうとう私の思いが叶うん時がきた
のね！

「しかも好きな人の名前を10回言って「ワン」と鳴くと効果あり
やて」

「うそっ！？」

よし！そうとわかれば早速実行よ！

「高畑先生！高畑先生！高畑先生！高畑先生！高畑先生！（以下略）
ワン！！」

周りの視線がちょっと痛いけどこれで思いが叶うんなら安いもんよ

「……あははは、アスナ高畑先生のためなら何でもするねんな。ホントにやるとは……」

「殺すわよ」

さっきの嘘だったんだあ。思いが叶うと思ったのにい

ふわっ……

ん、風？でも、少し変な感じが……

「すみません」

side ネギ

「すみません」

僕は赤髪ツインテールの女の人と黒髪で優しそうな女の人に話しかける

あれ？この赤髪の人、失恋相が出てる。

しかもめちゃくちゃハッキリと……

教えてあげた方がいいよね

「あの～アナタ……失恋の相が出てますよ」

「え……な……し……しつ……って」

ん？どうしたんだろ？

「何だところんガキヤー！！」

「うわああ！？」

な、なんで怒られたの！？僕はただ親切で教えてあげただけなのに！

と、兎に角何か言わないと

「い、いえ何か占いの話が出てたようだったので」

「ど、どど、どういうことよ！テキスト言つと承知しないわよ！！」

「い、いえかなりドギツイ失恋の相が……」

「ちょっとおおおっ」

なんで怒ってるんだろ？親切で教えてあげたのに

でも、相当怒ってるからこのままだと何されるかわからない
どうしようお姉ちゃん

「なあなあ相手は子供やるー？この子初等部の子と違うん？」

助かった！横の黒髪の女の人が庇ってくれた

「アタシはねガキは大ツツキライなのよ！！」

「うひ」

赤髪の女の方はそう言っ僕頭を掴んで持ち上げた

嘘ッ！いくら僕が子供でも

片手で持ち上げるなんて！？馬鹿力にも程がある！？

「取・り・消・しなさいよ〜」

「あ、いや、あわわ」

取り消すも何も出ちゃってるんだからしょうがないじゃないか！？

「坊や、こんな所に何しにきたん？」

あつ！そうだこんなことしないで早く道を聞かないと

「ここは、麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子校エリア。初等部は前の駅だよ？」

「そう！つまり子供は入ってきちゃいけないの！わかった！？」

「は、放してください！！」

あうう。な、なんて乱暴な女の人なんだ！？日本の女の方は親切で優しいって聞いたのに

このままだったら道を聞けないし、修行だつて出来ないよ

「ほな。ウチら用事あるから一人で帰つてな」

「じゃあねボク！！」

あわわ。大変だ！この人たちがどこかに行く前に道を聞かないと

「いや、あのボクはただ道を…」

「いや！いいんだよアスナ君！」

僕が道を聞こうとした時に誰かの声がした

「お久しぶりでーす！！ネギ君！」

「えっ！？」

あれ？赤髪の女の人の感じが変わった？

それにあの人は…

「た、高畑先生！？お、おはようございま「久しぶり！タカミチーッ！！」」

タカミチがいるってことは何だかんだで話してる？うちに着いちゃ

第二話 新任教師は子供先生！！（後書き）

リゼル「おい、作者！」

作者「ん？なに？」

リゼル「ん？なに？じゃねえよ！！前の更新から何日たったと思っ
てんだよ！？」

作者「いや……それは……ハハハ」

リゼル「笑ってごまかすんじゃないやねえ！！」

作者「くぼあ！？」

リゼル「この小説を読んでくれている皆さん。すいませんでした。
このバカにはちゃんと言っときますんでこれからも「魔法先生ネギ
ま！」時空を統べるもの」をよろしくお願いします」

主人公設定

作者「本編はひとまず置いて……」

リゼル「置いてくくなよ！第二話書い早くもネタ切れか？」

作者「フッフ、甘いなりゼル君はショートケーキより甘いよ」

リゼル「どこをどうしたら俺が甘いつて話になるんだよ！？しかもそのネタ古い！！」

作者「とある小説家になろうの作家は言っていた」

リゼル「……スルーかよ。」

作者「小説には必ず主人公設定をいれましょうと！！」

リゼル「……ホントに言ってたのか？」

作者「……………さあ、主人公設定いつてみよう！！」

リゼル「また、スルーかよ！？」

作者「主人公の名前は？」

主人公「質問形式でやるのか。しかも、この時だけ俺の名前の所、主人公って書いてるし……」

作者「ほらほら早く答えて答えて」

主人公「わかったよ！答えればいいんだろ答えれば！？」

作者「わかればよろしい」

主人公「もういい。この話は終わってから二人でじっくりO・H
A・N A・S H Iしよう」

作者「何か怖いこと言われた気がするけど気にせず改めて質問する
よー！ 主人公さんアナタの名前は？」

主人公「リゼル・D・クライス」

作者「身長は？」

リゼル「さあ、測ったことないからなあ……ネギより少し大きいくらいかな」

作者「体重は？」

リゼル「これも測ったことないから答えられないな」

作者「年齢は？」

リゼル「数えて10歳だからまだ9歳かな」

作者「容姿は？」

リゼル「茶髪でコバルトブルーが濁った感じの瞳で簡単に言つとアメリカ人の失敗作だな！」

作者「髪型は？」

リゼル「んゝまああれだよ、FF7のクラウドみたいな髪型かな」

作者「使える魔法は？」

リゼル「一樣、炎と闇だけど魔力が少ないからあんまり魔法が使えないんだよねゝ。だから俺は稀少技能がないとホントの落ちこぼれってわけ」

作者「では最後の質問です。稀少技能を教えてください」

リゼル「えっ？俺知らないよ。作者まだ教えてくれてないじゃん」

作者「あれ……言ってなかったっけ？」

リゼル「言ってない」

作者「じゃあこの場を借りて発表しちゃいましょう！この小説の主人公の稀少技能は……」

リゼル「稀少技能は？」

作者「何がいい？」

リゼル「はひい？」

作者「はひいじゃなくて稀少技能は何がいい？」

リゼル「……なあ……もしかして……俺の稀少技能って決まっていなかったのか？」

作者「いやゝ。本人の希望を取らずに勝手にきめちゃダメだと思っ
てさ」

リゼル「この件もこれが終わったらじつくりO・H A・N A・S H
Iしようか」

作者「またまた怖いこと言われた気がしますすが気にしないでいき
たいと思います」

リゼル「えっと希望だけどさ」

作者「おう！何でも言っちゃってよ！」

リゼル「この小説のタイトルが「魔法先生ネギま！〜時空を統べる
もの〜」なんだからさ、俺の能力は時間と空間を操る力がいいかな」

作者「チートだね〜」

リゼル「この小説の説明にも主人公チートとか書いてんだし別に
いだろ」

作者「他には希望ある？」

リゼル「他にはないから後は適当に決めてくれ」

作者「ん、わかった。じゃあ個人的にギアスとか複写眼とか入れた
いからその辺りはよろしくね」

アルファ・ステイグマ

リゼル「このままだと俺が半端なくチートになりそうな気がするな……」

作者「たぶん全部は入れないと思うし、もし入れても頑張って制限かけるから大丈夫だって」

リゼル「なるほど。じゃあこの話しはここで終わらせて向こうでさっきのことをじっくりO・H A・N A・S H Iしようか」

作者「全力猛ダッシュ!!」

リゼル「逃がすか!!」

作者「くべあ!?!」

リゼル「さあ、あっちでじっくりとO・H A・N A・S H Iしような」

作者「いいいややああああああああああ!!」

第三話 俺が副担任！？（前書き）

10000ピット……！

これからよろしくお願いしますm（
（ m

第三話 俺が副担任!?

side リゼル

「ネギが帰ってこない……」

ネギが道を聞きにいつてからどれ位たっただろうか

ネギの奴何処まで聞きに行ってたんだよ

……はあ

面倒けどネギが帰ってこないんだししょうがないか

俺はそう思って道を聞き麻帆良学園女子中等部に向かった

俺が女子中等部に向かっている途中に事件は起きた

「キャーッッ!!何よコレーッッ!!」

そつ、どこからか女の人の悲鳴が聞こえたのだ

俺は急いで悲鳴のした方に走っていった

そして見てしまったのだ

学校の前で下着姿になってうずくまってる女の人を……

side アスナ

どうなってるのよ！？いきなり強い風が吹いたと思ったら服が飛んでいったじゃない！？

高畑先生にも見られちゃったし／／／

もう高畑先生の顔見れないじゃない／／／

「えっと……これってどういう状況？」

アタシがそんなことを
思っていると何処からか声がした

声のした方を見るとそこにはあのガキンチョと同じくらいの男の子
がいた

side リゼル

落ち着いて考えてみよう

今、俺の前には下着姿の女の人がうずくまっている。それにネギが若干怒ってるような感じもする

と、とにかくネギに話を聞いてみるか

「おいネギ、これはいったいどういう状況なんだ？」

俺がネギに問いかけるとネギは俺の所によって来て小声で話しかけてきた

「（実は僕くしゃみしちゃって、そしたら武装解除が暴発しちゃったみたいで……）」

そういやコイツって魔力はあっても魔力制御が出来なかったんだっけ……

まあ、あの人たちは気づいてないみたいだから大丈夫か

別に俺は魔法がばれようが構わないんだけどな

ネギには今後気をつけるように言っとけばいいか

無駄だと思うけど……

「（あの人たちも気づいてないみたいだし大丈夫だろ。今度から気をつければいいさ）」

ん？そついやさっきは気づかなかったけどあれってタカミチじゃないか？

「おーい！タカミチー！」

「あつ、り、リゼル君じゃないか？そついえば君の修行場所もここだったね」

あれ？タカミチの顔が赤い

あつ！そついえば忘れてたあの女の人、下着姿だったっけ

「タカミチあの人に替えの服持ってきてあげて」

「あ、うん。学校のジャージを持ってくるよ」

タカミチはそう言つて校舎にジャージを取りにいった

さてと、さすがにあのままだと可哀想だよね

俺は羽織っていたスーツを脱いでうずくまってる女の人にかけてあげた

「あ、ありがとう……／＼／＼」

「ネギが迷惑かけたようですね。俺の名前はリゼル・D・クライスです。これからネギと一緒にこの学校で先生をやることになりましたのでよろしく願います」

一応挨拶はしといた方がいいよな

あゝあ、やっぱり驚いてるよ教室とかいったら質問責めにあうんだろうな……逃げようかな

俺がそんなことを考えているとタカミチがジャージを持って帰ってきた

「替えの服を持ってきたよ。はいアスナ君、これを着て」

「あ、ありがとうございます……た、高畑先生／＼」

あれ？この子の顔が赤い……もしかして照れてる？それとも下着姿を見られたからか？

「さてと、それじゃあ二人とも学園長室に行こうか」

俺がまたまた考えているとタカミチが学園長室に行こうと言ってきた

面倒けど行くしかないんだろうな。学園長に挨拶とかもしなくちゃいけないし………適当でいいか

それで何だかんだで学園長室の前にいる

えっ？何？話が途中で切れた？
気にするな。気にしたら負けだ

今、学園長室の前には

俺とネギとタカミチと神楽坂さんと近衛さんだ

ここに向かっている途中に自己紹介をしておいた

神楽坂さんは朝のことを相当怒っているらしく自己紹介の時も機嫌が悪かった。まあ矛先はネギだけだけどね

それじゃあ学園長室に入りますか

タカミチが学園長室の扉を叩いた

「学園長、ネギ君達をお連れしました」

「おお来たか。入ってくれ」

中から声がしたのでその声に従って中に入る

そして中にいたのは学園長ではなく

「ぬ、ぬらりひょん……!？」

「誰がぬらりひょんじゃ!？ワシは立派な人間じゃ!!」

「嘘つけ!!そんなに存在を主張した後頭部で人間のはずがない!
!」

「そ、そんなハッキリ否定せんでも」

ぬらりひょんが涙目で何か言ってるがあんな後頭部持ってるやつが人間のはずがない

「り、リゼル君……あの人はこの学園の学園長で立派な人間だよ」

「……嘘だろ」

「認めたくないのはわかるよ僕も最初はそうだったからね」

「タカミチ……わかった認めるよあのぬらりひょんが人間だってこと」

「ワシってそんなに人間に見えない……？」

「うん。見えない」

俺は学園長らしき物体の
質問をとびきりの笑顔で返事をしてあげた

この日から数日、夜な夜な学園長のすすり泣きが聞こえたとか

「なるほど。修行のために日本で学校の先生を……そりゃまた大変な課題をもろったの」

「は、はいよろしく願います」

「そう思っなら仕事減らせよジジイ」

「お主はネギ君と違って可愛いげがないの」

当たり前だろ俺はネギみたいな優等生じゃないんだよ

「まあ二人には今日から3月までは教育実習という形で先生をやってもらおう。それにネギ君とリゼル君には高畑君に替わって2年A組の担任と副担任をやってもらおう」

「はい！わかりm「ちょっと待つてください！」」

ネギが返事をしようとしたら神楽坂さんが異議ありという感じに割り込んできた

「子供が先生なんておかしいじゃないですか！？しかもうちの担任だなんて……」

「そうだそうだ！なんで俺がネギのサポートなんてしなくちゃいけないんだ面倒くさい」

俺と神楽坂さんは意見が合ったので協力して学園長を納得させようとアイコンタクトをとった

「しかし、これは決まったことじゃから変えることは出来んよ。それにリゼル君、A組の副担任が嫌ならもつと面倒くさい仕事しか残つとらんぞ？」

それは困るな……ん？ネギのクラスの副担任なら俺の仕事を全部押し付けられるじゃないか

「わかったよジジイ。仕方ないから副担任やるよ」

「ちょっとアンタ裏切る気!？」

神楽坂さんが何か言ってるが気にしない。神楽坂さんには俺が仕事をサボるための犠牲になってもらう

「わかってくれたならいいんじゃない。では今日から早速やってもらうかの。」

「はい!」

「はい」

ここから俺の修行生活が始まるのだった

「ちなみにリゼル君には女子寮の管理人をもらうからの。それとネギ君にはしばらくアスナ君と木乃香の部屋に泊まってもらう」

「聞いてねえぞ（ないわよ）ジジイ!!」

ああ、何か面倒くさいことになりそう

第三話 俺が副担任！？（後書き）

作者「やっと三話完成した〜」

リゼル「三話の投稿にいつまで掛かってんだよ！反省したんじゃないのか！？」

作者「……ハハハ」

リゼル「笑って誤魔化すな！しかもそのネタ二回目！」

作者「まあまあいいじゃない。こうして投稿してるんだし」

リゼル「そうか……よくわかった。お前には制裁が必要だつてな」

作者「り、リゼル君……その手に持つてるのは何かな……？」

リゼル「フッフッフッ」

作者「うぎゃあああああああああ」

PV1万突破記念（前書き）

名無しの権兵衛さん、パピリオさん感想ありがとうございました

PV1万突破記念

作者「PV1万いったね」

リゼル「どうした？とうとうそんな幻を見るほどに狂ったか？」

作者「ひどー！ちゃんとPV1万いったからね！見てみなよ」

リゼル「見たって一緒だろ？どうせ現実を見るだけだぜ？」

作者「じゃあ見てみなよこのアクセス解析」

リゼル「えーダルい」

作者「ダルい言うなよ！ちゃんと見ろ！」

リゼル「しょうがないなあ、どれどれ……………あれ？おかしいな……俺まで幻が見える」

作者「いい加減に認めろよ」

リゼル「わかったよ認めるよ」

作者「何か言うことは？」

リゼル「疑ってすみませんでした」

作者「よろしい」

リゼル「それにしても作者は恵まれたよな」

作者「えっ？何が？」

リゼル「あの駄文な作品を見ってくれる人がこんなに居るなんて恵まれてるぜ」

作者「確かにね」

リゼル「なあ作者」

作者「何？」

リゼル「P V 1万突破記念に何かやろうぜ？」

作者「いいね！何やる？」

リゼル「んゝ何がいいかな？」

アスナ「アンタたち何やってんの？」

リゼル「あつ、アスナさん！実はP V 1万突破記念という形で何やろうか悩んでるんですよ」

アスナ「えっ？この作品ってそんなに見てくれた人いたの？」

リゼル「居たんですよ。優しい人たちですよね」

アスナ「本当よね。こんな駄文な作品を見てくれたんだものね？アタシならプロローグで読む気無くすわ」

リゼル「ですよ〜」

作者「何か俺って虐められてる？」

リゼル& a m p・アスナ「気のせいだ（よ）」

作者「……そう思うことにするよ」

リゼル「それでアスナさん、何かいい案ありませんか？」

アスナ「ん〜何もないわね〜。他の奴も呼んで聞いてみる？」

作者「そうしますか」

アスナ「じゃあ何人か呼んでくるわね」

リゼル「じゃあ残った俺たちで考えるか」

作者「そうだな。そういえばさ、リゼルってアスナのことアスナさんって呼んでたけど本編は神楽坂さんだよな？何で呼び方変わってるの？」

リゼル「ここは時間軸がバラバラだからいいんだよ。いずれアスナさんって呼ぶしね」

作者「適当だな」

リゼル「適当 イズ ベスト!!」

作者「何か疲れるわそのノリ」

リゼル「疲れるとかもう歳か？」

作者「失礼な！？俺はまだ16だ！！」

リゼル「へーそうなんだ。老けて見える（ボソ）」

作者「聞こえてるぞ」

リゼル「幻聴だよ」

作者「もういいわ」

アスナ「呼んで来たわよ」

リゼル「あつ、ありがとうございます！」

木乃香「いきなり呼んでどないしたん？」

アスナ「いやね。この作品がPV1万突破したから記念で何かやることになったのよ。それで何をやるか考えてほしいの」

ネギ「わかりました皆で考えましょう」

木乃香「んー何がええやろな？」

ネギ「質問コーナーなどはどうでしょう？」

作者「えー面倒」

リゼル「誰もお前の質問じゃないだろ」

アスナ「質問って誰が質問するの？」

ネギ「読んでくれている人がリゼルに聞きたいことなどを質問したりするんですよ」

リゼル「えっ？俺が答えるの？」

アスナ「だってアタシ恥ずかしいし」

木乃香「うちも恥ずかしいわ」

ネギ「僕もちよっと……」

作者「諦める」

リゼル「いやだー!!」

アスナ「それでリゼルへの質問ってあったの？」

作者「……ない」

アスナ「じゃあできないじゃない!」

作者「じゃあ今から質問したい事を感想に書いてもらってある程度集まったら答えるというのは？」

ネギ「それでいきましょう」

アスナ「それしかないわね」

木乃香「じゃあ決まりやな」

リゼル「俺の意見は？」

作者「あるわけないじゃん」

リゼル「ひどー!!」

作者「そういうことなので感想待ってます」

アスナ「じゃあこの続きはまた今度？」

作者「そうしますか」

木乃香「じゃあ解散やな」

作者「最後に読んでくれた人たちにお礼を言って終わりますか」

ネギ「そうですね」

アスナ「ほらリゼル、そんな所で落ち込んでないで一緒に言っわよ」

リゼル「シクシク、わかりました」

作者「じゃあ皆でいくぞ。せーの」

作者&リゼル&アスナ&木乃香&ネギ「読んでくれた皆さんありがとうございます。これからよろ

しく願ひします」

PV1万突破記念（後書き）

リゼル「何でもっと早く突破記念やらなかったの？」

作者「忘れてたんだよ」

リゼル「大事な事を忘れやがっていつぺん逝くか？」

作者「漢字違うよね！？逝くになってるよ！？」

リゼル「あってるよ逝くで」

作者「えっ、ちよつと待って」

リゼル「待たない（＾Ｏ＾）」

作者「ごめんなさい！許して…ぎゃあああああああああああああああああー！！」

第四話 クラスの人たちは元気すぎる！（前書き）

ウォローさん、希竜刹那さん感想ありがとうございます！

第四話 クラスの人たちは元気すぎる！

side リゼル

俺達は今、2年A組に向かって歩いている

えっ？女子寮の管理人の件はどうなったかって？

あのジジイに上手く丸め込まれたんだよ！

それとネギが神楽坂さんと近衛さんの部屋に居候するって言う話もジジイが上手く神楽坂さんを丸め込みやがった

あのジジイ人を丸め込む技能は神の領域だわ

あれだけはジジイに勝てなかった……orz

そういえば神楽坂さんが「アンタなんかと一緒に暮らすなんてお断りよー！」ってネギに言っでどっか行ったときのネギの顔は面白かったな

かなり困ってたしな

おっ何だかんだ言っでると着いたみたいだな

「ネギ……このクラスだよな？」

「うん。ちょ、ちょっと緊張してきたね」

「大丈夫よ二人とも。このクラスの子は元気な子ばかりだからすぐに慣れるわ」

「でもやっぱり緊張しますよ。しずな先生」

しずな先生と呼ばれた人は俺らの指導教員だ

「ふふふ。それより授業の方は大丈夫なの？二人とも。ハイ コレ、クラス名簿」

「あ、どうも」

ネギがしずな先生にクラス名簿を貰って中を見る

「げっ……い、いっぱい……」

ネギがクラス名簿を見て驚いている
いっぱいってどの位いるんだ？

「ネギ俺にも見せて」

「うん。いいよ」

俺はネギからクラス名簿を貰って中を見る
……覚えるの面倒くさそう

「ふふふ。早く皆の顔と名前が覚えられればいいわね」

しずな先生が俺とネギに言う

「はい。頑張って早く覚えるようにします!」

ネギが元気に答える

「じゃあ教室に入りましょうか？」

「ち、ちよつと待ってください」

しずな先生が教室に入るように言つとネギが緊張してるのか少し待つてもらい深呼吸をする

落ち着いたみたいなので教室のドアを開けようとネギがドアに近づいた時、俺は教室のドアに引っ掛かっているあるものに気づいた

「おいネギ、上に黒ば…」

「えっ？」

……遅かった。ネギは俺が黒板消しの存在を教える前にドアを開けて見事に魔法障壁で落ちてきた黒板消しを止めた

s i d e ネギ

「おいネギ、上に黒ば……」

「えっ？」

リゼルから何か言われたので振り返ろうとすると上から何か落ちてきた

落ちてきた物は僕の魔法障壁ある位置で止まる。僕は落ちてきた物の方を見ると

これは……黒板消し？

はっ、しまった！これは有名な黒板消しトラップ！日本にもあるんだ！

僕はすぐに展開していた魔法障壁を解いた。すると止まっていた黒板消しが僕の頭に落ちる。よほどチョークの粉が付いていたのか粉がまっけて咳き込む

そしてすぐにその場の空気を取り繕うために言葉を発する

「ゲホゲホ、いやーあはは、なるほどひっかかったなあ、ゴホ」

僕は何とか誤魔化そうと出来る限りの笑顔で前へ進む。
すると……

「へぶっ！？あばあああああああぎゃふんっ！！」

足下にあったトラップにかかってしまい転んでさらに上から水の入ったバケツが落ちてそのまま転がりオモチャの矢が降ってきて最後には教卓にぶつかった

side リゼル

見事に全部掛かったなあ。クラスの人たちは爆笑してるししずな先生なんて苦笑いしてるよ

あつ、クラスの人たちがネギが子供って気づいたみたいだな。みんな慌てて駆け寄って心配してるな。

しかも、新任の教師と思われてないな

あつ、しずな先生が俺たちの事を説明している

「じゃあ二人に自己紹介してもらおうかしら」

俺たちは自己紹介をするために教卓の前に立つ

「じゃあまずネギ君から」

「は、はい！」

おお、ネギの奴緊張してるなあ

「ええと……あ……あの……ボク……ボク……今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願いします」

今、思いっきり魔法って言いそうになったよなコイツ……
大丈夫なのかこの先……

「じゃあ次はリゼル君」

「あつ、はい」

自己紹介か……ネギみたいに言えばいいか

「えつと……今日からこの学校で歴史を教えることになりましたリゼル・D・クライスです。ネギ先生と同じで3学期の間だけです。皆さんと仲良くやっていきたいと思いますのでよろしく願います」

こんなんでいいか。たぶん可笑しいところはないだろ

……あれ？やっぱし何かミスったか？何か静まり返ってるぞ

「「「キャアアアッ！！！！かわいいー！！！！」」」

おわー！！ビックリしたー！！いきなり大声出さないで欲しいな耳がキーンとする

うわー！！皆こっちきたー！！

俺は皆がこっちに来る前にしずな先生の所まで避難するが逃げ遅れたネギは女子生徒の集団にもみくちゃにされてる

あゝあ……可哀想に……なんて思うわけないだろ

世の中は厳しいってことをネギに教えとかなないと。別にネギの困ってる顔が面白いとか思っていないからな！本当に思っていないからな！

「リゼル君、笑顔が黒いわよ」

「そんな事ないですよ」

俺はそんな黒い笑顔なんてできないですよ
そんな事を考えていると女子生徒の一人がネギの胸ぐらを掴んで持ち上げる

「ねえ、アンタさっき黒板消しに何かしなかった？何かおかしくない？あんた」

「え……？」

side アスナ

あのガキンチョが教室のドアを開けた時に双子が仕掛けた黒板消しが落ちただけどその時に黒板消しがあのガキンチョの頭の上で一瞬止まったのよね。絶対に何かしたわね

そんな事を考えていると皆がああのガキンチョの周りに集まっているのでアタシはその人混みを掻き分けてガキンチョの胸ぐらを掴んで持ち上げてさっきの事を聞いた

「ねえ、アンタさっき黒板消しに何かしなかった？何かおかしくない？アンタ」

「え……？」

あからさまにギクツとした顔をしたのでアタシはガキンチョの胸ぐらをさらに掴んで言う

「キツチリ説明しなさいよー！ー！！」

アタシがガキンチョを問いただしていると横から声がした

「いい加減になさい！！」

第四話 クラスの人たちは元気すぎる！（後書き）

リゼル「どんなけ放置してんだよ！」

作者「いやゝ、色々と忙しくてさゝ」

リゼル「忙しいって何してたんだよ？」

作者「まあ、そんなことより質問きてるから答えてねゝ」

リゼル「……話し変えやがった」

作者「では一つ目の質問です。クラスの中で一番狙う人は？」

リゼル「……黙秘権を使用します!!」

作者「却下します」

リゼル「何故だ！？国民には黙秘する権利があるはずだ!!」

作者「今の貴方にそんな権利はありません」

リゼル「理不尽だああああああああ」

作者「じゃあ答えてね」

リゼル「糞!……えゝと一番狙う人ねゝ……………今の所はアスナさんかな」

作者「今の所？」

リゼル「まだクラスの人の顔と名前覚えてないし」

作者「じゃあ本編が進んだらもう一度聞きますか」

リゼル「だが断る！！」

作者「却下します。次の質問いきますよ」

リゼル「……理不尽だorz」

作者「次の質問です。エヴァと大停電の時に闘うのか？」

リゼル「いやいや、これは作者が答える質問だろ」

作者「じゃあ作者から答えますか。エヴァとは闘いますよ。ちなみにその時にリゼル君の能力をあかす予定です」

リゼル「俺ってそれまで力使っちゃダメなのか？」

作者「ダメです。時間がないので次の質問いきますよ」

リゼル「……orz」

作者「次の質問です。ネギのフラグを幾つ折るのか？」

リゼル「さあ。何本折れるんだろうな」

作者「少なくとも三本は折る予定ですよ」

リゼル「少なくともってまだ増えるのかよ」

作者「増えると思いますよ」

リゼル「面倒くせ」

作者「最後の質問いきますよ。容姿をキャラクターで例えるなら誰か？」

リゼル「ん」。あれだな。FF7のクラウドを茶髪にして明るくした感じかな」

作者「イケメン乙」

リゼル「何か言った？」

作者「いや、何でもない。……一通りの質問終わったけどこんなうやむやな感じの答えでいいのかよ？」

リゼル「いいんじゃないね」

作者「いやいや、ダメでしょ」

リゼル「あっ！そういえば今日は新発売のパフェが食える日だわ。じゃあ俺は帰るわ！パフェが俺を待っている！」

作者「あっ！ちょ！……逃げやがった。」

作者「質問の答えがこんなのですいません。今後ともよろしく願
いします」

第五話 魔法がバレた！？（修正しました）（前書き）

月野さん感想ありがとうございます！

それとこの話は少し修正しました

第五話 魔法がバレた！？（修正しました）

side リゼル

何でこうなった？

今、俺の目の前で神楽坂さんと金髪の女性（クラスの人からは委員長と呼ばれてた）が喧嘩していてクラスの人達がその喧嘩を煽ったりしている
何を言ってるのかわからないだろうが俺も何を言ってるのかわからない

「はいはい、皆時間もおしてるし授業しますよー！一時間目はネギ先生なのでお願いします」

「は、はい…」

スゲーよしずな先生。あの喧嘩を一発で止めやがった

そういえば俺はどうすればいいんだ？

ネギの授業が終わるまでここに居ればいいのか？

俺がそんなことを考えているとしずな先生が此方に来て「リゼル君の授業は次の時間だから準備の為に職員室に案内するわね」と言ってきたので俺はそのまましずな先生に職員室まで案内してもらった

職員室に案内された俺は他の先生たちに挨拶をした後に授業の準備をして2・Aの教室に向かった
教室に向かっている途中でネギとすれ違ったが何か負のオーラが漂ってたような気がする

教室についた俺は扉を開けて中に入り皆を席に着かせて授業をしようとしたが

「今から授業をしたいと思いますが面倒なので今日は質問タイムにしちゃいます！」

俺がそう言つと皆は「やったー!!」「や「イエーイ!!」」など言っている。

テンション高いなこのクラス…

「じゃあクラスを代表して私が先生に質問しちゃいます」

声のした方を見ると何かマイクと録音機を持ったパイナップルヘアの女の人が立っている

「じゃあ、朝倉さんよろしくお願いします」

「おつ、先生もう名前覚えたの？」

「さっきの時間に職員室で頑張つて覚えてきました」

ずっとクラス名簿とにらめっこしてたから目が疲れたけどね

「じゃあ、一つ目の質問！好きな食べ物は何？」

「パフェです！パフェ最高です！良ければこの辺りでパフェの美味しい店を教えてくださいませんか？」

「んゝ、この辺りだとやっぱり食堂のパフェかな」

食堂のパフェか……今度行ってみるか

「次の質問いくね。何でこの学校で先生をすることになったの？」

「紙に書いてあったからです」

「「「……は？」「」「」

あれ？俺何か間違えた事言ったか？嘘は言っていないはずだけど…

「よ、よく解らないけど最後の質問。ズバリ！この中で彼女にするなら誰？」

この中ということはこのクラスの中か……
んゝ、やっぱり神楽坂さんか近衛さんかな

「神楽坂さんか近衛さんですね」

「何でその二人なんですか？」

「この中なら一番面識があるからですかね」

キンコーンカーンコーン

俺がそう言つと丁度チャイムが鳴った

「チャイムが鳴ったので質問は終わりにしますね。まだ何か聞きたいことがあったらいつでも来てくださいね」

そう言つて俺は教室から出て職員室に戻った

それで何だかんだあつて俺は放課後に広場の像の前の階段に座つてネギと今日の授業について話している
えっ？跳ばしすぎ？気にしちゃ負けだつて。話しても面白くないよ？それに話すの面倒しさ

「それでさ、その神楽坂さんって人がひどい人なんだよ」

「そうか？ そんなにひどい人には見えなかったけどな」

「ひどい人なの！！ それに今日はあの人の所に泊まられていわれたけど絶対泊めてくれそうにないし……どうしよう」

何か大変そうだな。そういえば俺も女子寮の管理人やれって言われたんだっけ……管理人って何やればいいんだよ
ん？あれは……

「なあネギ、あれって宮崎さんだよな？」

「えっ？あ、ホントだ。あんなにたくさんの本持って危ないなあ」

確かに危ないな。転ばなきゃいいけど——って言ってるそばから
転びやがった！！

「ネギ！！」

「あ、うん！！」

そう言いネギは杖を出して風の魔法で落ちる直前で宮崎さんを浮か
せた

俺はそれを見て全力で走って宮崎さんを受け止めた

「ふう、何とか間に合った。宮崎さん大じ……」

俺は最後まで言わずに固まった

「リゼルー！大丈夫！？」

ネギも叫びながら此方に来たが同じようにネギも固まった

「あ……アンタたち……」

目の前に神楽坂さんが居たからだ

「あ……いや、あの……その」

ネギが何か言おうとしてるが無理だろ

！？しまったー！！言っちゃったよー！！どうしようー！？
そ、そうだー！！り、リゼルに助けをー！！

「り、リゼルどうしょ——！？」

い、いない！？何処行っただの！？
まさか僕を置いてにげたんじゃ……
もうこつなったら仕方がない

「秘密を知られたからには仕方ありません。記憶を消させていただきます」

「ええ！？」

えーと……記憶を消す呪文は……

「ちょっとパーになるかもですが許してくださいね」

「ギャー！！ちょっと待ってー！！」

待てと言われてもこのままだと本国に強制送還されてオコジヨにされるので待ちません！

「消えろーーっ！！」

「キャアアアー！！」

side リゼル

俺は今、さっきネギと居た所に座っている
何で神楽坂さんから逃げれたかという俺の能力のおかげだ
能力が何かというのはまた今度話すから今はまだきかないでね！

「さてと……これからどうしようか？」

多分神楽坂さんにはもう魔法のことはバレてるだろうしな
俺的には別に魔法がバレようが構わないがバレた理由がネギの魔法
が見られたとなると俺までオコジョにされかねないから何とかしな
いとダメなんだよな

「キャアアア！！」

俺が今後の対策を考えていると茂みの方から悲鳴が聞こえた

この声は神楽坂さんか？大方ネギの奴が魔法がバレたから記憶を消
そうとして間違って服を消しちゃった的なやつだろ

まあ、神楽坂さんにはこの学園中の魔法先生が記憶を消そうとして
も無理だろうがな

さてと……ちょっと様子でも見に行きますか

S i d e アスナ

「秘密を知られたからには記憶を消させていただきます!」

「ええっ!?!」

き、記憶を消すってアレよね!!忘れさせるってことよね!!
ヤバイって何とかしないと

「ちょっとパーになるかもですが許してくださいね」

「ギャー!!ちょっと待って!!」

パーってなによ!?パーって!?

本格的にヤバイってどうしよう!!

「消えるー!!」

「キヤアアア!!」

終わった……アタシの記憶が——ってあれ？

記憶が消えると思ったアタシは今の状況に頭がついていていない
え？どういう事？アイツが記憶を消そうとしたけど消えたのは実は
服で——って服！？

今アタシは上着だけを着ていてあとは裸になってる
やっと自分の状況を理解したアタシは

「いや——！！！」

悲鳴をあげることしか出来なかった
このガキ後で殺す！！
そう胸に誓った矢先

「おいそこの二人何やってるんだ？」

え？この声は高畑先生？
ヤバイって今の姿を見られたら

アタシのその思いもむなく高畑先生に今の姿をバッチリ見られて
しまった
そしてアタシは

「いや——！！！」

また悲鳴をあげることしか出来なかった

第五話 魔法がバレた！？（修正しました）（後書き）

作者「あのさ」

リゼル「ん〜？」

作者「何でアスナさんに捕まってんの？台本と違うじゃないか！？」

リゼル「え〜！別にいいじゃん。アドリブの方が面白いって！」

作者「いや、よくないから！お前のせいであの後がめっちゃおかしいことになったじゃないか！？」

リゼル「そこは作者の文才でカバーしてよ」

作者「文才ないんだから無理だよ！！」

リゼル「そういえばそうだったな」

作者「何かムカつくな。まあいいや、次回から台本通りやってくれよ」

リゼル「努力はしよう」

作者「大丈夫かな……？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351p/>

魔法先生ネギま！～時空を統べるもの～

2011年6月26日18時16分発行